# 数の力で押しつぶす

Edain

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、とある男の物語。

男に特別な才はなく、特別な運もなかった。

これは、”一人軍隊（ワンマンアーミー）”と呼ばれるようになる男の物語。

※この小説は「小説家になろう」さんで連載中の〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の二次創作です。

作者はＷｅｂ版しか読んだことがありません。

広域制圧型が書きたくなっただけの自己満足小説です。

不定期更新ですので更新が遅くなるかもしれませんがご了承ください。

# 目次

第０話　プロローグ　1
第一話　始まりの１日　8
第二話　黄河に向けて　13
第三話　ＶＳ【ウルフェン】　18
第四話　再出立　23

# 第０話　プロローグ

□２０４３年７月１５日

今朝、何気なくテレビを見ていた俺はとあるニュースを見た。

そのニュースは〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉というゲームに関するもので、そのゲームは五感を完璧に再現し、億単位の人数でも同時にプレイできるサーバーを用意し、現実視、３ＤＣＧ、２Ｄアニメーションの３通りのグラフィックを選択でき、ゲーム内では現実の三倍の速度で時間が進むと言うのだ。

始めそれを見たとき、さすがにそれは嘘だろうと思った。それは〈ＮＥＸＴ　ＷＯＲＬＤ〉と言う前例があったからだ。

だが、わざわざ全世界同時中継をしているのだ、さすがに全てを信じるわけではないがそれでもそれなりには期待できるだろう、と思い、特にすることも無かった俺はすぐに〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉を購入するために近所のゲームショップに赴いた。購入する際、１万円と言う価格を見て不安が大きくなったがどうせすることも無かったのでそのまま購入した。

そして、そのまま家に帰った俺はすぐに〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉を起動した。

◇

気がつくとそこは書斎のような部屋だった。いたって普通の、これと言った特徴もない部屋。しかし、俺は驚愕していた。なぜなら、普通の部屋と認識してしまうほどに、現実と思ってしまうほどにリアルだったからだ。

「ふむ、君が私の担当する一人目のプレイヤーか」

ふと、そんな言葉が聞こえてきた。

声のした方を向くと、一人の男性が立っていた。男性は、よく見ると皮膚がところどころ鱗や革になっており、頭にはまるで悪魔のような角が生えていた。人と言うよりは悪魔、モンスターと言った方がいいような外見だが、顔にかけているメガネのお蔭で一見すると普通の人間のように見えた。

「私は管理ＡＩ４号、名はジャバウォックという」
　管理ＡＩ…ゲームを管理するＡＩと言うことか。そして４号と言うことは他に最低でも3体の管理ＡＩが居るのだろう。
「さて、早速だが初期設定を始めていこう。まずは描画選択だ。サンプル映像を見せるので好きなのを選んでくれ」
　ジャバウォックがそういうと周りの風景が書斎から街並みへと変わった。
　街には人々が歩いており、しばらくすると景色が変わった。いや、景色は変わっていない、見え方が変わったのだ。おそらくこれがサンプル映像なのだろう。さらに同じくらいの時間で再び見え方が変わる。そしてしばらくすると元の書斎へと風景が戻った。
「今一通り見せたのがそれぞれ現実視、３ＤＣＧ、２Ｄアニメーションだ。好きな表示方法を選んでくれ。ちなみに、アイテムを使うことで後から切り替えることも可能だ。もう一回サンプル映像が見たいならもう一度流すが、どうする？」
「いや、いい。現実視で頼む」
　せっかくのダイブ型ＶＲＭＭＯなのだ、どうせならリアルに近い方がいい。
「了解した。では次にプレイヤーネームの設定だ。これは基本的にあとから変更することはできない。どうする？」
「そうだな…じゃあハインツで頼む」
　この名前は俺が以前からネット上で使っている名前だ。別の名前を使ってもよかったが考えるのが面倒だったためいつも通りにした。
「ハインツだな…次はアバターの設定だ」
　ジャバウォックがそういうと、目の前に俺と同じくらいの大きさのマネキンとたくさんの画面が現れた。
「これはどう弄ればいいんだ？」
「そこにある画面でパーツを選択できる。選択した後はスライダーを使って調整してくれればいい。ちなみに、動物型や俺のような姿にも出来るがあまりにも現実の姿からかけ離れたものにすると慣れるまで上手く体が動かせなくなるから注意してくれ」

なるほど、たしかにいきなり翼を生やしたりしてもどう動かしたらいいのか分からない。
「そうだな…とりあえずリアルの姿にすることはできるか？」
「あぁ、可能だ」
すると、マネキンがリアルでの俺の姿になった。
そこから髪を金髪にし、目を碧眼にし、１７６ｃｍで止まってしまった身長を１８０ｃｍまで伸ばし、アバターが完成した。
半年ほど床屋に行っていないせいで髪が伸び、ぼさぼさになってしまっているがそれはそう言う髪型として放置しておいた。別に自分で弄って変な風になるのが嫌だったわけではない。
「これで完成だ」
「了解した。では初期配布アイテムを渡しておこう」
そういうと、空中から鞄が一つ落ちてきた。
「これは収納鞄というもので、所謂アイテムボックスという物だ。中は収納用の異次元空間につながっている。持ち主の物なら入れることができるが、それ以外の物は入れることができないから注意してくれ」
「分かった」
窃盗などには使えないということだろう。
「《窃盗》スキルのレベルが高いとアイテムボックスに入っている物も盗めてしまうので注意してくれ。それと、これは初心者用でサイズは教室一つ分、重さは1トンまで入るものだが、他にも《窃盗》対策の取られたものや容量の大きいものもある、足りなくなったら購入するといい。あぁ、それとアイテムボックスの類は壊れると中身がばら撒かれるので耐久度には気をつけろ」
「あぁ、分かった」
返事をし、鞄を受け取る。
「次は初期装備だな。防具と武器をこの中からそれぞれ選んでくれ」
そういうと、１冊のカタログを渡してきた。初めの方を見てみると、様々な防具が載っていた。
そのまま読み進めていくと、後ろの方のページには木刀や刃を潰し

た模擬剣、ナイフ、弓、スリング、杖など様々な武器が載っていた。
「そうだな…防具はこの革鎧を、武器はこの摸擬剣を頼む」
「了解した。それと、初期資金を渡しておこう」
　そういうと、ジャバウォックは俺に5枚の硬貨を渡してきた。
「それは銀貨で、1枚１０００リル、初期資金は銀貨5枚だから５０００リルだ。物価はおにぎり1つで１０リルくらいだ」
　おにぎり1つで１０リルと言うことは１０リルで１００円くらい、５０００リルだと５００００リルと言うことか。
「初期資金にしては多いな」
「あぁ、初期資金がなくなる前に自力で稼げるようにと多めにしてある」
　なるほど、じゃあ初期資金は計画的に使わなければいけないな。
「さて、次に〈エンブリオ〉を移植する」
「エンブリオ？」
　このゲーム特有の要素だろうか。
「ふむ、そういえばエンブリオの説明が必要だったな。では、エンブリオについて説明しよう。エンブリオは〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の特徴の一つで、プレイヤーそれぞれに応じて進化するパートナーのようなものだ。エンブリオは全プレイヤーがゲーム開始時に渡される。渡された時は全て同じ形の第０形態として渡される。が、第一形態以降はプレイヤーに合わせて独自に進化していく。第一形態以降にはカテゴリーという物があり、大まかに説明すると
　プレイヤーが装備する武器や防具、道具型のＴＹＰＥ：アームズ
　プレイヤーを護衛するモンスター型のＴＹＰＥ：ガードナー
　プレイヤーが搭乗する乗り物型のＴＹＰＥ：チャリオッツ
　プレイヤーが居住できる建物型のＴＹＰＥ：キャッスル
　プレイヤーが展開する結界型のＴＹＰＥ：テリトリー
　の5種類が存在する。これら以外にもレアカテゴリーやエンブリオが進化した際になれる上位カテゴリーが存在する」
「なるほど、しかしレアカテゴリーが存在するならそれが手に入るま

でやり直すやつも出てきそうだな」
「それに関しては問題ない。こっちの方で脳波データを登録しているから仮にもう一つ機器を買ったとしてもログインした先は同じキャラクターになる」
　なるほど、じゃあ問題なさそうだ。
「さて、説明している間に〈エンブリオ〉の移植は完了した。左手の甲に有るのが＜エンブリオ＞だ」
「ん？……いつのまに!?」
　ジャバウォックに言われ左手の甲を見てみると、そこには淡く輝く卵型の宝石が埋め込まれていた。
「第０形態では手の甲についているが第一形態以降は手の甲から外れ、代わりに手の甲にはエンブリオの紋章が現れる。紋章はプレイヤーであることの証明になるほかに〈エンブリオ〉を収納することも可能だ」
「なるほど」
「では最後になるが、所属する国を選択してくれ」
　そう言うとジャバウォックは書斎の机の上に地図を広げた。
　それは古びたスクロール型の地図だったが、広げ終えると地図上の七か所から光の柱が立ち上がり、その柱の中に街の様子が映し出された。
「この光の柱が立ち上っている国が初期に所属できる国になる。柱から見えているのはそれぞれの国の首都の様子だ」
　光の柱の周囲には、国の名前や説明が光の文字となって浮かんでいる。
　白亜の城を中心に、城壁に囲まれた正に西洋ファンタジーの街並み
　騎士の国『アルター王国』
　桜舞う中で木造の町並み、そして市井を見下ろす和風の城郭
　刃の国『天地』
　幽玄な空気を漂わせる山々と、悠久の時を流れる大河の狭間
　武仙の国『黄河帝国』
　無数の工場から立ち上る黒煙が雲となって空を塞ぎ、地には鋼鉄の

都市
機械の国『ドライフ皇国』
見渡す限りの砂漠に囲まれた巨大なオアシスに寄り添うようにバザールが並ぶ
商業都市郡『カルディナ』
大海原の真ん中で無数の巨大船が連結されて出来上がった人造の大地
海上国家『グランバロア』
深き森の中、世界樹の麓に作られたエルフと妖精、亜人達の住まう秘境の花園
妖精郷『レジェンダリア』
どの国も魅力的で、正直どれか一つに決めるというのは難しい。
「これは、始めてから所属する国を変えたり他の国に出かけたりすることは可能なのか？」
「あぁ、他の国に行くことはできるし所属する国を変えるイベントも存在する」
なるほど、他の国に行くこと自体は普通にできるが所属する国を変えるにはイベントをこなさなければならないのか。
だが、変更できるならすべての国を見てから決めることも出来そうだ。
「そうか…なら、アルター王国で頼む」
「了解した。よければ、参考程度に選んだ理由を教えてくれ」
「あとから所属する国を変えられるなら初めは無難な国でいいかと思ったからというのもあるが、騎士の国と言うのに引かれてな」
騎士ってかっこいいと思うんだ、うん。
「なるほど、協力感謝する。では、これからアルター王国の王都アルテラに飛ばすが、その前に」
そういうと、ジャバウォックは一度息を吸い込んだ。
「〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉では、すべてが自由だ。英雄になるのも魔王になるのも、王になるのも奴隷になるのも、善人になるのも悪人になるのも、何かをするのも何もしないのも、全てが

君の自由だ。出来ることは何をしたっていい」
言いながら、こちらを見る。
「〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉へようこそ。”私達”は君を歓迎しよう。ハインツ、君の旅路に幸多からんことを」
その言葉を聞いた直後、周囲の景色が切り替わった。
書斎から、アルター王国の王都アルテラ――――ではなく、空中へ。
「…は？」
眼下に広がるのは、先ほどまで見ていた地図と同じ形の大陸。
そして、俺の体は落下していく。真下にあるアルター王国。その首都、王都アルテラへ。
「はあああああぁぁぁぁぁぁぁ!!??」
空中に、俺の叫び声を響かせながら。

# 第一話　始まりの1日

□王都アルテア南門前　ハインツ

「ふぅ…ひどい目にあった」

人生初のスカイダイビングを終えた俺の口から出た言葉は、その一言だった。

いくらゲームの中だとはいえ、さすがにあれは死を覚悟した。いや、あのままだったら確実に死んでいただろう。実際は不自然なほど無事に着地できたわけだが。

「それにしても…ゲームだとは思えないな。現実と変わらないんじゃないか？」

目の前に広がる光景に、思わずそう呟く。

広がる草原、澄み渡る青空、燦々と輝く太陽、そして背後にそびえる巨大な門。

目に入る全てが現実としか思えないクオリティだった。

そして、風邪の吹き抜けていく感触、生い茂る草の臭い、足の裏に感じる地面を踏みしめる感触から、五感の完璧な再現言葉が嘘や誇張では無いことが理解できる。

だが――と考えながら、メニュー画面を開く。これはあくまでもゲームなのだ。どんなに現実のようでも、ゲームはゲーム。現実とゲームの区別はしっかりとつけなければならない。

そう考えてから、まずは何をすべきか考える。このまま草原に見えるモンスターらしきものを狩りに行ってもいいが、やはりまず最初にすべきは情報収集だろうと考え、背後にそびえる門に巨大な門の向かって歩き出した。

◇

あれから、門の近くにいた衛兵らしき人と会話をしたり、街の中に入って街の人と会話をしたりした結果、様々な情報を手に入った。そのなかでも重要なものをあげると、

〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉において、プレイヤーは〈マスター〉、ＮＰＣは〈ティアン〉と呼ばれているということ。

ジョブに就かないとレベルをあげることができないということ。
ジョブに就くにはジョブクリスタルと言うものを使わなければいけないということ。
ジョブには下級職、上級職、超級職（スペリオルジョブ）の三種類があるということ。
下級職はレベル５０、上級職はレベル１００が上限だが超級職には上限が無いということ。
超級職は一つのジョブに同時に一人しかつくことができなく、転職するための条件もかなり厳しいということ。
下級職は６つ、上級職は２つまで同時に就くことができ、合計レベル５００が一般的にカンストとされているということ。
超級職は就くことができる数に限りはないが１つに就くことも厳しいため基本的に２つ以上の超級職にはつけないとされているということ。
ジョブに就くとそのジョブのギルドでしか受けられないクエストが受けられるようになるということ。
冒険者ギルドというお約束の建物があり、そこではジョブに関係なくクエストを受けられるということ。
くらいだろうか。他にも情報屋の情報などもあったが、それは今はそこまで必要ではないと判断した。
十分な情報を集められたと判断した俺は、情報収集を切り上げ、ジョブに就くためにジョブクリスタルに向かった。
ジョブクリスタルに触れると、現在就くことのできるジョブの一覧が表示された。〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉を始めたばかりだというのにかなりの量があるそれの中から、アルター王国を始めの国に選んだ理由でもある【騎士】を見つけ出し、それに転職した。
ステータス画面を開き、転職できていることを確認すると、俺は初めに降り立った草原へと駆け出した。
◇
その後俺は、しばらくの間モンスターを狩り続けレベルを上げた。
初めは自分の体を動かしモンスターと戦うというのが新鮮で楽し

かったのだが、何体も買って(狩る)いくとだんだんと作業に近くなっていき、しばらくすると「数が足りない」と思うようになってきた。
〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉というＶＲＭＭＯをやってはいるが、俺が一番好きなのはＲＴＳだ。軍隊を指揮して大規模戦闘を行うというゲームが好きな俺にとって、〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の戦闘は、新鮮さがあるうちは楽しいが、作業になってくると規模が小さくつまらないものだった。
その後もしばらく戦闘を続けていき、何十体目かのモンスターを倒したところで、それは起こった。
「ん？何だこれは…何処から出てきたんだ？」
突然俺の手の中に一冊のノートパソコンくらいのサイズの大きな分厚い本が現れたのだ。
不思議に思いじっと眺めていると、いきなり目の前にウィンドウが表示された。
召喚魔本　レメゲトン
ＴＹＰＥ：アームズ
到達形態：Ｉ
装備攻撃力：０
装備防御力：０
ステータス補正
ＨＰ補正：Ｇ
ＭＰ補正：Ｃ
ＳＰ補正：Ｇ
ＳＴＲ補正：Ｆ
ＥＮＤ補正：Ｆ
ＤＥＸ補正：Ｆ
ＡＧＩ補正：Ｇ
ＬＵＣ補正：Ｇ
「うぉっ…びっくりした。つまりこれは俺のエンブリオって事か？」
攻撃力と防御力がどちらも０なことを不思議に思いながらも読み進めていくと、『保有スキル』と言う項目を見つけた。

確認してみると、そこには
『保有スキル』
《召喚》：
ＭＰを５消費し人間範疇生物を１人召喚する。
《召喚・〇〇》と唱えることで自身のついたことのある、または自身のつくことができる下級職の人間範疇生物を召喚可能。
１人につきパーティー枠を１消費し、パーティー枠が埋まっている場合は召喚することができない。
３０分間召喚でき、召喚時のレベルは基本的には１だが、召喚者と同じジョブの人間範疇生物を召喚した場合、召喚者と同じレベルになる。
アクティブスキル
と表示されていた。
「ふむ…まさに求めていたものじゃないか」
プレイヤーに応じて進化するというのは本当だったようだ。
「では早速…《召喚：騎士》」
そう唱えると、手元にあった本がひとりでに開き、開いたページの片方に魔方陣が浮かび上がった。
それと同時に、１メートルほど前方の地面にも同じ魔方陣が浮かび上がり、一瞬発行したかと思うと魔方陣は消え、代わりに一人の男が立っていた。
「プレイヤー…ではないな、ＮＰＣでもなさそうだし、ならこれが召喚された人間範疇生物か」
どうやら召喚される人間範疇生物と言うのはその名の通り人間と同じ姿形をしているようだ。
召喚された男は、初期装備を選ぶときにあった金属鎧と、俺も選んだ摸擬剣を装備していた。
「とりあえず戦わせてみるか…ちょうどいいところにいるし、あれでいいか。よし、いけ」
そう命令すると、男は俺の指差したモンスターに向かって行き、戦闘を始めた。

「指示には従うようだな…どうやら戦闘能力はそこまで高くないようだ。今のうちにパーティーメンバーがいっぱいになるまで召喚しておこう《召喚：騎士》《召喚：騎士》《召喚：騎士》《召喚：騎士》」

４人召喚したところで、パーティーメンバーが上限に達したという通知が来る。

「ふむ…パーティーは６人が限界か。どうにかしてパーティー枠を増やしたいが…あとで情報屋に行ってみるか」

そこまで考えたところで、最初の男がモンスターを倒し、こちらに帰ってきた。

「さて…それじゃあ、とりあえず召喚が切れるまで狩るか。よし、行くぞお前たち」

◇

その後、召喚が切れるまでモンスターを狩り続けた俺は、情報屋に行きパーティー枠を増やす方法が無いかと聞いたところ、《部隊指揮》と言うスキルの情報を手に入れることができたので、すぐにそのスキルを取得しに行き、その日はログアウトした。

# 第二話　黄河に向けて

□アルター王国冒険者ギルド　【司令官】ハインツ

俺が《Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ》を始めてから、こっちの時間で３ヶ月、リアルでは１か月ほど経った。

あれから、世界中で〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉ブームが巻き起こった。世界中が待ち望んだ夢のゲーム機が完成したのだ、当然だろう。

そして、あれから俺は【騎士】と【指揮官】の二つの下級職をカンストさせ、【司令官】という上級職を後１０レベルでカンストというところまで上げていた。

《部隊指揮》のレベルも上限の１０まで上げ、レメゲトンも第三形態まで上げている。

第三形態となったレメゲトンの性能は、こうなっている。

召喚魔本　レメゲトン

ＴＹＰＥ：アームズ

到達形態：Ⅲ

装備攻撃力：０

装備防御力：０

ステータス補正

ＨＰ補正：Ｅ

ＭＰ補正：Ｂ

ＳＰ補正：Ｇ

ＳＴＲ補正：Ｄ

ＥＮＤ補正：Ｄ

ＤＥＸ補正：Ｅ

ＡＧＩ補正：Ｅ

ＬＵＣ補正：Ｆ

『保有スキル』

《召喚》：

ＭＰを５消費し人間範疇生物を１人召喚する。

《召喚・〇〇》と唱えることで自身のついたことのある、または自身のつくことができる下級職の人間範疇生物を召喚可能。
１人につきパーティー枠を1消費し、パーティー枠が埋まっている場合は召喚することができない。
３０分間召喚でき、召喚時のレベルは基本的には1だが、召喚者と同じジョブの人間範疇生物を召喚した場合、召喚者と同じレベルになる。また、ジョブごとに経験値を共有でき、次回召喚時にレベルを引き継ぐことが出来る。
アクティブスキル
《召喚枠拡張》Ｌｖ３：
自身のパーティー枠拡張スキルの効果をレベル分倍にする。
Ｌｖ３では3倍にする。
パッシブスキル
まず、ステータス補正だが、ＭＰが飛びぬけて高い。これは、《召喚》を多用して物量で押すという戦闘スタイルゆえに《召喚》のためのＭＰを確保する必要があったからだろう。
次に、《召喚》だが、説明文にも書いてあるがジョブごとに経験値を共有できるようになった。これは、召喚している間に経験値が貯まりレベルが上がった場合、次に召喚するときにレベルが上がった状態で召喚することができる。さらに、同じジョブを複数召喚している場合召喚されていても経験値を共有しているようで、人数分の経験値が入るためにレベルがすぐに上がった。
最後に、《召喚枠拡張》だが、説明文に書いてある通りパーティー枠拡張スキルの効果を上昇させるスキルだ。今俺の持っているパーティー枠拡張スキルは《部隊指揮》だけで、普通１０レベルでは２０人分拡張なのだが、《召喚枠拡張》Ｌｖ３の効果によって、６０人分拡張になっている。これは、俺の戦闘スタイル的にかなり重要なスキルで、レベルを上げることで倍率も上がるようなので是非とも早目に上がってほしい。
俺は今、冒険者ギルドに来ている。目的は、賞金首のリストだ。
【司令官】の次のジョブとして、黄河帝国と天地でしか転職すること

ができない【兵法家】に就こうと思い、カンストさせてから移動していたら道中の経験値が勿体無いので今のうちから移動を開始しようとしていた。
賞金首のリストは、道中警戒すべき敵の情報を仕入れるために確認しに来ていた。
「【群狼　ウルフェン】か…」
【群狼　ウルフェン】、現在唯一賞金首のリストに乗っているモンスターであり、〈ＵＢＭ〉（ユニーク・ボス・モンスター）というのは、唯一（ユニーク）の言葉が示すように、この世界に一体しか存在しないボスモンスターの通称である。
ボスモンスターでも、通常は同種が複数対存在する。だが、〈ＵＢＭ〉は違い、後にも先にも同種は存在しない。
さらに、〈ＵＢＭ〉は全て特殊な固有能力や高い戦闘能力を有している。
そのかわり、討伐できた際にはもっとも活躍した者がＭＶＰに選ばれ、特典武具が与えられる。
特典武具は、本人にアジャストしたアイテムが送られ、原則として討伐した〈ＵＢＭ〉の保有スキルを劣化させた装備スキルと高い装備補正を持つ場合が多く、譲渡・売却は不可能で盗まれることもない。そんな代物が手に入るのだ、もちろん〈マスター〉同士で争奪戦が起こったが、ウルフェンは未だに健在だ。
我先にと飛び出した〈マスター〉を、全て返り討ちにする。〈ＵＢＭ〉というのはそれほどまでに強力な存在なのだ。
「できれば遭遇したくないな」
もちろん俺も討伐できるのならしたい。だが、今のレベルではほかの〈マスター〉達と同じように返り討ちにされてしまうだろう。もちろん、こちらに有利な地形で戦えば勝てる可能性はあるが、可能性は低いだろう。
なぜなら、【群狼　ウルフェン】の戦闘スタイルは群れを率いて戦うものであり、俺の戦闘スタイルと同じタイプの物なのだ。
戦闘スタイルが同じならば、勝つのは当然戦闘能力の優れている方

である。そして、〈ＵＢＭ〉であるウルフェンは当然戦闘能力が高い。となれば軍配は俺ではなくウルフェンに上がる。
「まぁ、こればかりは祈るしかないか」
ウルフェンの居場所が分かるなら避けていくこともできるが、当然居場所なんて分かるわけもない。
賞金首のリストの確認と言う目的を果たした以上、このままここに居る理由もない。
俺は、黄河王国に向けて出発した。
◇
王都アルテラを出立した俺は、王都アルテラの東に広がる平原を歩いていた。
《騎乗》スキルを持っているので従魔に乗って移動することも考えたが、そうすると《召喚》で呼び出した味方がついてこれないのでやめた。モンスターと遭遇してから《召喚》を使っていたら遅いからだ。
時々遭遇するモンスターを味方に倒させながら進んでいき、もうすぐカルディナとの国境というところで、それに遭遇した。
「ん？あれはリトルゴブリン…じゃないな。ゴブリンウォーリアーとゴブリンアーチャーの…群れか？」
前方に、ゴブリンの集団を発見したのだ。
ゴブリンが集団でいることは不思議ではない。こいつらは大体集団で行動しているからだ。
そして、武装していることも何らおかしくはない。多くはないが、【ゴブリンウォーリアー】や【ゴブリンアーチャー】等の武装をしたゴブリンに遭遇したこともあったからだ。
しかし、その集団には違和感があった。
「しかし群れにしては数が少ない…それに、妙に統率がとれている」
そう、群れにしては数が少なすぎるのだ。
確認できたのは【ゴブリンウォーリアー】が６体、【ゴブリンアーチャー】が４体の、合計１０体。群れにしては少なすぎる。
さらに、ウォーリアーがアーチャーを守るように前に立ち、その陣形のままこちらに近づいてくるのだ。

通常のゴブリンの群れであれば、こちらを視認した瞬間に我先にとこちらに攻撃をしてくるのだ。だが、奴らは隊列を組み、そのままこちらに近づいてきている。
「まぁ、たいした驚異ではないか。お前たち、攻撃しろ」
俺が指示を出すと、呼び出されていた味方が一斉に攻撃を始める。
３０秒ほどで戦闘は終了した。
「特別強いというわけでもないか…ならあの動きは一体…」
あまりの呆気なさに、あの統率のとれた動きは一体なんだったのかと考えていると、再びゴブリンの集団がこちらに近づいてきた。
「こいつらも妙に統率のとれた動きをしている…それに数までさっきと同じだ」
一体こいつらは何なのかと考えていると、背後から地を蹴る音が聞こえてきた。
「っ！お前たち、迎撃しろ!!」
俺の指示に反応して、味方が背後から接近してきていた敵を迎撃する。
「なんだ？ティールウルフ…？」
俺たちに背後から接近していた敵は、【ティールウルフ】という狼型のモンスターだった。

# 第三話　ＶＳ【ウルフェン】

□【司令官】ハインツ

「くそっ…こいつら、きりがねぇ」

最初にゴブリンの集団と遭遇してから、既に３０分以上経過していた。

味方がやられたり召喚時間が切れたりするたびに再召喚していたが、敵は途切れるどころか徐々にその同時に襲いかかってくる数が増していた。

「どうなってやがる…ゴブリンとティールウルフが連携を取って襲いかかってくるなんて聞いたことが無いぞ…」

ゴブリンとティールウルフは、同じ地域で見かけることはあっても同時に襲いかかってくることはなかった。むしろ、争いあう姿が確認される程度には仲が悪い。

しかし、こいつらは同時に襲いかかってくるどころか連携まで取っている。

それに、ティールウルフはこのあたりではあまり見かけなかったのに、ゴブリンの集団と遭遇してからはどんどん襲い掛かってきている。何か原因があるのは明らかだった。

「ティールウルフだけだったらウルフェンがいるのかもしれないが…ゴブリンと連携してくるのは説明ができない。それに、聞いた話によるとウルフェンは仲間に指示を出すだけでなく自身も襲い掛かってくるらしい。もしウルフェンがいるのだとしたら襲いかかってきているはずだ」

一体何が原因なのか考えながら、襲い掛かってくる【ゴブリン】と【ティールウルフ】を倒していると、突然敵が出てこなくなった。

「なんだ…？」

ついにすべての敵を倒したのかと思っていると、周りから再び【ゴブリン】と【ティールウルフ】が現れた。しかし――

「囲まれてるじゃねぇか…」

敵に取り囲まれていた。３６０度見渡す限り敵だらけ。さらに、先

ほどまでと同様に【ゴブリンウォーリアー】が前に出て【ゴブリンアーチャー】を守るように構える。そして【ティールウルフ】は周囲を走り回り、隙を見せた瞬間に襲いかかろうとしている。
これを突破するのは骨が折れそうだ、と考えていると、
「おいおい…冗談じゃねぇぞ、こいつらだけでも厳しいってのに…」
それは現れた。
他のモンスターとは格が違うことが一目でわかった。
それは狼の姿をしていた。色は【ティールウルフ】と同じ灰色だが、体躯が通常の【ティールウルフ】の数倍はあった。体は毛並みに覆われ、顔には幾つか傷がついていた。
そして、頭上には、【軍狼　ウルフェン】の文字。
「【軍狼　ウルフェン】だと…【群狼　ウルフェン】じゃねぇのか…？」
ハインツには知りえない事だが、【群狼　ウルフェン】は〈マスター〉を返り討ちにし続けた結果、力を付け、そして逸話級から伝説級へと成長し、【軍狼　ウルフェン】へとその名を変えていた。
「まぁいい…まずはこの状況をどう乗り切るかだ…」
周囲を完全に取り囲まれ、さらに〈ＵＢＭ〉という強力な敵も存在する。絶体絶命という言葉がふさわしい局面だ。
「今まで出てこなかったボスが出てきたってことは、出てこなきゃ不味くなったってことだ…今まで出てこなかったのは、こっちが疲弊するの待ってたってことか。なら、いつまで経っても数が減らないのに痺れを切らしたか？なら、最大戦力で一気に決めに来るだろうし、周りにいるやつらで最後って感じか」
これ以上出てこないのなら話が早い。
「雑魚どもを蹴散らしてからボスを囲んで叩く。いくぞお前ら、まずはゴブリンとティールウルフを狙え！」
『ＶＯＷＷＷＷ』
俺が味方に指示を出すのと、【ウルフェン】が配下に指示を出すのは、同時だった。
◇
そこからは敵味方入り混じった乱戦だった。

男が【ゴブリンウォーリアー】を倒し、その男を【ゴブリンアーチャー】が撃つ。その【ゴブリンアーチャー】を別の男が射殺せば【ティールウルフ】が襲いかかる。
味方がやられれば即座に再召喚するこちらに対し、敵は徐々に数を減らしていった。問題の【ウルフェン】は５０人がかりで抑え、その間にさらに敵を減らした。
このままいけば勝てると思ったその時、【ウルフェン】が行動を起こした。
『ＷＯＷＷＷＷＷ』
【ウルフェン】が遠吠えをした瞬間、敵の動きが速くなり、攻撃が重くなり、こちらの攻撃が通りにくくなった。
「なんだ…急に強くなりやがった…スキルを使いやがったな。だったらこっちも《グレイトコマンド》!!」
スキルの効果で強化された敵に対抗するため、こちらも【司令官】の奥義を使用する。《グレイトコマンド》は、５分間パーティーメンバーのステータスを１．５倍にするスキルで、かなり強力なスキルだ。
「今のうちに雑魚をすべて蹴散らせ!!」
そう指示を出しながら、自身も敵を倒すために走り出す。自分で敵を倒すのは得意ではないが、最もステータスが高い上にスキルによるバフも乗っているのだから味方だけに任せるのは効率的ではない。
１分ほどして、【ウルフェン】以外の敵をすべて倒し終わった。
「このまま奴を倒すぞ!」
味方をすべて失った敵に対し、やられてもすぐに再召喚できるこちら。時間が経てば有利なのはこちらに思えるが、実はそうではない。
再召喚するたびにＭＰを消費するため、ＭＰが底をつけばこちらが一気に不利になるのだ。さらに、先ほど使用した《グレイトコマンド》によるバフも、新たに召喚された味方には付与されないため、時間が経てば有利になるどころか、時間をかければかけるほどこちらが不利になるのだ。
だから、この勢いのまま出来るだけ早くこいつを倒してしまいたかったのだが…

『ＧＲＵＡＡＡＡ!!』
そう簡単にはいかなかった。
【ウルフェン】が再び吠える、今度は【ウルフェン】が強化された。
「くっ、流石にそううまくは行かないか、ＭＰも少なくなってきた…ここが正念場だ!!【弓手】は距離をとって撃て!!狙いは顔だ!!【騎士】は囲んで抑えろ!!絶対に自由にさせるなよ!!走り回られたら負けだと思え!!」
これまで一心不乱に攻撃を仕掛けていた味方が指示通りに動き始めるのを見て、自身も動き始める。狙うは顔、最もダメージの通りやすい部分だ。
それからは、ひたすらに攻撃し、味方がやられた分だけ再召喚するの繰り返しだった。
【ウルフェン】が前足を振り下ろし、【騎士】が一人やられる。やられたのを確認した瞬間、《召喚・騎士》を使用し数を減らされないようにする。
しかし、これまでの戦闘でも《召喚》を使用しており、当然ＭＰは殆ど消費しているわけで…
「《召喚：騎士》！《召喚：騎士》!!…くそっ、ＭＰが切れやがったか!!」
ＭＰが底をつくのに、１分もかからなかった。
「【弓手】は目を狙え!!やられる前にやるぞ!!【騎士】は等間隔で囲め!!間が空いてもいい、とにかく包囲を崩すな!!」
再び指示を出し、自身も【ウルフェン】の目を狙う。そして…
「これで、終いだぁぁ!!」
俺の突き出した剣が、【ウルフェン】の目に突き刺さった。
【〈ＵＢＭ〉【軍狼　ウルフェン】が討伐されました】
【ＭＶＰを選出します】
【【ハインツ】がＭＶＰに選出されました】
【【ハインツ】にＭＶＰ特典【軍狼帽　ウルフェン】を贈与します】
◇◇◇

□■???

【軍狼　ウルフェン】

最終到達レベル：３１

討伐ＭＶＰ：【司令官（コマンダー）】ハインツ　Ｌｖ８５（合計レベル：１８５）

〈エンブリオ〉：【召喚魔本　レメゲトン】

ＭＶＰ特典：伝説級【軍狼帽　ウルフェン】

「おや…」

闇の中に、情報ウィンドウが怪しく浮かび上がる。

その内容に目を通し、それ――管理ＡＩ４号　ジャバウォックが声を発する。

「ハインツ…彼はたしか、私の担当した一人目のマスターだったな」

それは、ログを確認しながら続ける。

「ふむ…彼の戦い方は他の〈マスター〉達とはかなり違うようだ。まるでチェシャのような戦い方だな。是非とも〈超級〉に至って欲しいところだ」

「最近は徐々に〈ＵＢＭ〉が討伐される回数も増えてきた。この調子で順調にいって欲しいところだな」

そう言って、ジャバウォックは自分の仕事に戻っていった。

# 第四話　再出立

□【司令官】ハインツ

「ふぅ…なんとか勝てたか…」

どっと疲労を感じ、その場に座り込む。

落ち着いて考えてみると、〈ＵＢＭ〉である【ウルフェン】に勝つことができたのは、奇跡としか言いようがなかった。

「とりあえず、戦利品の確認をするか」

【ウルフェン】を倒した時に手に入った特典武具を取り出す。

見た目は灰色の軍帽で、正面には狼の横顔のエンブレムが付いている。

「見た目は悪くないな。俺好みだ」

そのまま、装備する前に性能の確認もしておく。

【軍狼帽　ウルフェン】

〈伝説級武具（レジェンダリーアームズ）〉

軍団を率いし狼の概念を具現化した伝説の武具。

味方の無念を払う力を持つと共に、装着者に統率の心得を刻み込む。

※譲渡・売却不可アイテム

※装備レベル制限なし

・装備補正

防御力＋１００

・装備スキル

《軍狼》

《敵討》

《復讐》

《統率》

「装備補正は防御力しかないが、装備スキルが四つもあるのか」

装備スキルの効果も、順番に確認していく。

《軍狼》：

自身のステータスをパーティーメンバーの数×１％上昇させる。

上限は２００％。
パッシブスキル
《敵討》：
自身を含むパーティーメンバー全員のステータスを、５分間、その戦闘中にやられたパーティーメンバーの数×２％上昇させる。
一度の戦闘で1度のみ発動可能。
アクティブスキル
《復讐》：
範囲内にいる敵にパーティーメンバーを倒した数×５０の固定ダメージを与える。
アクティブスキル
《統率》：
自身の指揮が通りやすくなり、指揮に従っている間は統率のとれた動きをすることができるようになる。
パッシブスキル
「なるほど…いきなり強くなったのはこの《敵討》の効果か」
やられても再召喚でき、単体ではそう強くなくすぐにやられる俺の戦法でも《敵討》は活かせるだろう。
《復讐》は、俺の場合は数で押すため対象がバラけてしまい相性が悪かったが、恐らくはこのスキルを使い敵を倒すのが本来のスタイルなのだろう。それならば始めから【ウルフェン】が出てこなかったのも頷ける。これも《敵討》と同じ理由で俺の戦法でも活かすことができそうだ。
《軍狼》は、俺の戦法では正直微妙だ。今回のように少しでも数が多い方が良いという局面以外では俺は前に出ずに指揮をするのに集中するつもりだからだ。欲を言えば俺ではなく見方を強化するスキルが欲しかった。
最後の《統率》だが、【ゴブリン】達の統率のとれた動きは十中八九このスキルのお陰だろう。【ゴブリン】が【ティールウルフ】と共に【ウルフェン】に従っていた理由は分からないままだが。
「しかし…特典武具というのはこうも強力なのか。他のマスター達が

奪い合うのも納得できるな」
〈ＵＢＭ〉を倒した強者が特典武具を手に入れ強くなり、さらに上位の〈ＵＢＭ〉を倒し、特典武具を手に入れる。というサイクルで強くなることを想定しているのだろう。
しかし、このサイクルだと強者の中でもさらに一握りのものが飛び抜けて強くなり、それ以外のものとの差が広がる一方になってしまう気がするが、その差を埋めることのできる何かが有るのだろうか。
「まぁ、その一握りの強者になれば良いだけの話か。幸い、こうして他のマスターよりも早く特典武具を手に入れる事が出来たんだ」
目指すは、強者の中でも一握りの強者。
「取り敢えず、一旦アルテラまで戻るか。賞金を受け取らないとな」
特にアルテラでなければ受け取れないというわけではないが、このまま進めばカルディナに入ってしまうため、アルター王国の賞金首である【ウルフェン】の賞金を受けとることができなくなってしまう。せっかく討伐できたのだから、賞金は欲しい。
それに、さっきの戦いでＭＰポーションを使いきってしまったのでそれも補充しておきたかった。
「少し休んだらまた召喚して出発だな」
◇
「さて。今度こそ出発だ」
賞金を受け取り、アイテムを補充して再び門を出る。
討伐の証明は、【軍狼帽　ウルフェン】を見せることで簡単にできた。
賞金を受け取る時、ギルドに居た〈マスター〉達に羨ましがられたが、簡単に【軍狼帽　ウルフェン】のスキルを説明したら、特典武具に対する妬みは無くなった。まぁ俺のような数で押すことができるエンブリオやジョブでもない限りこの能力は使えるものではないのでしょうがないが現金な奴らだ。
そして、改めて俺はアルター王国を出立した。
「目指すは黄河帝国だ」
出来れば、今度の道中は穏やかであってほしいと祈りながら。